

Alice's Adventures in Wonderland

日本語翻訳比較研究

山口 淳子

Lewis Carroll の著書 *Alice's Adventures in Wonderland* は世界各国で翻訳されている。1865年に初版が出版され、その後の百年間に少なくとも47カ国の言語に翻訳されたという。日本でも何人もの人によって幾度となく翻訳されており、それは現在も続いている。日本語ではその書名は『ふしぎ（不思議）の国のアリス』と翻訳されている。原題を少々意識したものであるが、現在数多くある翻訳書はこの書名に統一されている。しかし、書名が皆同じであっても、内容の翻訳はそれぞれに違った個性あるものになっている。この論文ではそれらの翻訳書を様々な観点から比較していきたい。

比較に使用した翻訳書（初版年順 括弧内の年号は使用した本の出版年）
田中俊夫訳

岩波書店 岩波少年少女文庫 初版 1955年（1988）

生野幸吉訳（独文学者）

福音館書店 福音館古典童話シリーズ 初版 1971年（1981）

多田幸蔵訳（英文学者）

旺文社 旺文社文庫 初版 1975年（1986）

福島正実訳（翻訳家）

角川書店 急川文庫 初版 1975年（1988）

芹生 一訳（工学博士）

偕成社 偕成社文庫 初版 1979年（1984）

石川澄子訳

東京図書 初版 1980年（1985） ※ Martin Gardner 注釈本の翻訳

高杉一郎訳（英文学者）

講談社 講談社文庫 初版 1983年（1990）

中山知子訳（欧米児童文学研究紹介者）

岩崎書店 フォア文庫 初版 1986年（1986 第2刷）

北村太郎訳（詩人、翻訳家）

王国社 初版1987年（〃）

立原えりか訳（童話作家）

小学館 てんとう虫ブックス 初版1988（〃）

高橋康也・迪訳（康也は有名なキャロル研究者）

河出書房新社 河出文庫 初版1988年（1988 再版）

楠 悦郎訳（英文学者）

新樹社 初版1989年（第3刷）

矢川澄子訳（詩人、作家）

新潮社 初版1990年（〃）

以上の13冊であるが、北村訳はいわゆる現代っ子言葉で訳したというものであり、特別なものとして考える必要がある。

これらの翻訳をいくつかの観点から種類分けすると次のようになる。

	出版の形態			翻訳者		文体	
	児童書	文庫本	単行本	英文学者	英文学者以外	敬体	常体
田中訳	○					○	
生野訳	○				○	○	
多田訳		○		○		○	
福島訳		○			○	○	
芹生訳	○				○	○	
石川訳			○			○	
高杉訳	※ ¹	○		○		○	
中山訳	○			○（欧米児童文学）		○	
北村訳			○		○		○
立原訳	○				○	○	
高橋訳		○		○		○	
楠 訳	※ ²		○	○		○	
矢川訳			○		○		○

表の文体の欄を見ると、詩人だけが常体に訳していることがわかる。

※¹ 高杉訳は後に、講談社青い鳥文庫という児童書に転用されている。

※² 楠訳は単行本であるが、児童向けであるといえる。

翻訳比較(1) 文体と Alice の言葉使い

文体は大部分は敬体の形をとっている。それらの翻訳書で Alice の言葉使いも大体似通っていて、「……だわ」、「……かしら」といったようなお嬢様らしいものになっている。Alice のモデルとなった実在の人間 Alice Liddell は、オックスフォード大学のクライスト・チャーチ学寮長の娘という身分で、ある程度の上流階級に属していたのだから、その Alice の言葉使いをお嬢様らしく丁寧に訳すことは正しいことではある。しかし、Alice は 7 歳ほどの少女であり、あまり丁寧すぎるのも堅苦しい印象を与え可愛らしさに欠ける。そのあたり、どの程度子供らしさを表現しているか、またどの程度現代の言葉に近づけているかなどによって翻訳は微妙に違っているが、初対面の人（動物）には敬語を使い、慣れてくると子供らしい言葉使いになるなどの点はどの翻訳も同じである。

詩人の翻訳である 2 冊は常体の形をとっているがそれぞれに個性がある。まず、北村訳は先に述べたように現代っ言葉の文章である。翻訳者のあとがきによると「二十世紀末の日本で、そんなお嬢さんお嬢さんしたアリスなんて、似つかわしくないって、こう思ったわけなのさ。」という考えのもとに訳してあるので、Alice のイメージは限りなくお嬢様から離れており、乱暴な印象さえ受ける。しかし、翻訳者自身もあとがきに「すこし行きすぎなの、認めるけどさ、変えようと思って変えたあまり、変わりすぎたんだから、大目にみてくれてもいいじゃん。」と記しており、確かにこれは一つの試みとして、興味のある人にとっては楽しく読めるものである。

次に矢川訳であるが、この翻訳は子供向けの昔話によく使われるような文体で訳されている。（例えば「……はそう思ってね。」、「……ところだったんだ」など）子供向けの本は昔から敬体か、この矢川訳のような常体のどちらかで書かれているので、どちらがより子供向けらしいということはないだろう。Alice の言葉使いは北村訳ほどではないが、お嬢様

といったような印象はない。これら2冊の翻訳では、Aliceが敬語を使う場面は他のものに比べてかなり少ない。北村訳では敬語を使っても「……でーす」、「……まーす」のように語尾をのぼすことが多い。

以上のことを踏まえて、原書の同じ箇所の翻訳を比較してみたい。Chapter I. Down the Rabbit-Holeで、退屈しきっているAliceがそばにいるお姉さんが読んでいる本をのぞいてみると、挿絵も会話もないという場面がある。その次にくる文章が以下である。

“and what is the use of a book,” thought Alice, “without pictures or conversation?”¹⁾

Aliceの言葉使いがかなり丁寧なもの

多田訳

「あら、絵も会話もないご本なんて何の役に立つのかしら」とアリスは思いました。

高杉訳

「まあ、さし絵も会話もない本なんて、なんの役にたつでしょう」と、アリスは思いました。

Aliceの言葉使いに子供らしさのあるもの

田中訳

アリスは考えました。「絵も会話もない本なんて、いったいなんの訳に立つのかしら。」

生野訳

「これじゃ、なんのための本かしら」とアリスは思いました。「絵もなければ会話もないなんて？」

福島訳

「へんなの」とアリスは考えました。「絵もお話もない本なんて、なんの役にもたちはしないわ」

中山訳

絵も会話もない本なんて、いったいどこがおもしろいのかしらね。

立原訳

『さし絵のない本なんて、本じゃないと思うわ。』

アリスはそう思って、お姉さんの本から離れました。

高橋訳

アリスは思いました。「絵がなくて、おまけに会話もない本なんて、いったいなんの役に立つっていうの？」

楠訳

「さし絵も会話もない本なんて、なんの役に立つのかしら？」とアリスは思いました。

Alice の言葉使いでお嬢様らしくないもの

芹生訳

「やれやれ」とアリスは思いました。「いったい、なんの役にたつのかしら、字だけっきゃかいてない本なんて。」

石川訳

「挿絵も会話もない本なんてくだらないじゃない」とアリスは思いました。

北村訳

「絵ぬき、会話ぬきの本なんてさ、どこがおもしろいんだよ」とアリスは、声にださずにつぶやいた。

矢川訳

「挿絵もせりふもない本なんて、どこがいいんだろう」と思ってさ。

翻訳比較(2) キャラクターの名前

Chapter VII. A Mad Tea-Party に登場する March Hare は田中訳から楠訳までずっと「三月ウサギ (兎、うさぎ)」と訳されていたが、一番新しく出版された矢野訳において初めて「ウカレウサギ」という訳語が使われた。March Hare というのは発情期のウサギであり as mad as a March hare (発情期のウサギのように狂っている) という成句もある。「ウカレウサギ」という訳語は意味もよく伝わり、名前としても魅力のあるものである。

Chapter IX. The Mock Turtle's Story の題にもある Mock Turtle というキャラクターは、次のようにして生まれた。turtle soup (ウミガメスープ) は高価なので、代わりに子牛の頭を使ってつくるスープを mock

turtle soup という。もちろん mock は turtle soup の 2 語にかかる形容詞であるが、Carroll は mock と turtle を結びつけて一つの生き物としてしまったのである。日本では mock turtle soup というものは存在しないので、ただ訳してもわからない部分である。原書では Queen による次のようなセリフがある。

“Have you seen the Mock Turtle yet?”... “It’s the thing Mock Turtle Soup is made from.” said the Queen.²⁾

Mock Turtle は翻訳書ではそれぞれ以下のように訳されている。

Mock を先に訳しているもの	Turtle を先に訳しているもの
田中訳 にせ海ガメ	福島訳 亀まがい
生野訳 ニセ海ガメ	芹生訳 カメモドキ
多田訳 にせ海亀	高橋訳 ウミガメモドキ
高杉訳 にせうみがめ	矢川訳 ウミガメモドキ
中山訳 ニセウミガメ	
北村訳 ニセウミガメ	
石川訳 いかさま亀	
立原訳 まがい海がめ	
楠 訳 にせガメ	

特に注のないもの

.....高杉訳、北村訳、立原訳、楠訳、福島訳、矢川訳
スープがどんなものであるかという注があるもの

.....田中訳、多田訳、石川訳

この生き物の生まれた理由を説明しているもの

.....生野訳、中山訳、芹生訳、高橋訳

これらのうち中山訳は注で説明するのではなく、文章の中に説明を
り込んでいる。

中山訳

「英語で、モック・タートル・スープといえ、わかるだろうね？」

「タートル・スープなら、知ってるわ。そりゃあ、とびきりおいしいご

ちそうよ」

「それには、ほんもののウミガメを使う。だが、タートルはめったに手にはいらぬ。みなのは、そのかわりにコウシの頭でスープを作る。けっこうにたような味がする。で、モックはニセモノ、タートルはウミガメ。そのモック・タートル・スープの材料になる、あれさ」

わざわざ注に目を移すわずらわしさはなくなるわけだが、やはりわかりやすい日本語に訳すのは、たいへんなことのようにである。

翻訳比較(3) キャラクターの言葉使い

Chapter I. Down the Rabbit-Hole に登場して、Alice を Wonderland へ連れ込んだ White Rabbit の言葉使いの訳し方を次のセリフで比べてみよう。

“Oh my ears and whiskers, how late it's getting!”³⁾

このセリフは直訳するか、意識するかという点でも2つに分かれる。

田中訳 「やれやれ、耳よ、ひげよ、さても遅れたものじゃわい！」

生野訳 「おお、わたしの耳、わたしのひげ、おそくなるばかりだ！」

高杉訳 「ああ、わたしの耳よ、ほおひげよ。すっかりおそくなってしまった」

中山訳 「なお、おい、耳よ、おいらのひげよ。うわあ、なんたるちこくだあ！」

多田訳 「こりゃ大変だ！とんでもなくおそくなっちゃったぞ！」

福島訳 「なんてことだ、よわったな！どンドン遅くなっちゃう！」

芹生訳 「こいつはこまったぞ。ぴよんでもない遅刻だぞ。」

石川訳 「大変だ、大変だ、遅れちゃう！」

北村訳 「こまった、こまった、こんなに遅れちゃって！」

立原訳 「ああ、どうしよう。おそくなってしまったぞ。」

高橋訳 「くわばら、くわばら、すっかりおくれちゃった！」

楠 訳 「これはこれは！ずいぶんおくれてるぞ。」

矢川訳 「やれやれ、どうすんだい、たいした遅刻だよなあ！」

この中でお年を召したウサギであるという印象をうけるのは、田中訳と高橋訳である。田中訳の「じゃわい……」という語尾と、高橋訳の「くわばら、くわばら」という若者は使わないであろう言葉からそのような印象を受ける。また福島訳の語尾「……なっちゃう」も、高橋訳の「……ちまった」と共に少し年寄りの印象を受ける。若い印象を受けるのは多田訳と石川訳と北村訳である。これは「……なっちゃった」、「……ちゃう」、「……ちゃって」という語尾だからである。年令不詳というか若者とも年寄りとも思える訳は生野訳、高杉訳、立原訳、楠訳である。これらはごく一般的な言葉使いである。特に個性的なウサギは芹生訳、中山訳、矢川訳である。芹生訳はなんともウサギらしい言葉使いである。中山訳は「おいら」と「うわあ」が個性を出している。矢川訳はこの短いセリフにかなり翻訳者の個性が表れている。

Chapter V. Advice From a Caterpillar に登場する Caterpillar は、どこことなく賢者か哲学者といったような性格をもつキャラクターである。名は「イモムシ」「毛虫」「青虫」などと訳されているが、言葉使いはほとんど翻訳で似通っている。「おまえさんどなたかね」(多田訳)、「というのはどういう意味じゃ?」(田中訳)、「もどれ!」(高橋訳)などの言葉使いからは、年寄りで、少々態度が威張っているという印象が感じられる。しかし、石川訳では「あなたはどなたです」、「そんなことはありませんよ」などの改まった言葉を使っており先生のような雰囲気強い。また、楠訳では「きみはだれ?」、「もどっておいでよ!」などの若々しい言葉使いで、年寄りではなくお兄さんといった印象である。現代っ子訳の北村訳ではやはり「あーた、だーれ?」、「なーぜ?」などの特殊な言葉使いをしている。

翻訳比較(4) Alice の言葉の間違い

Chapter I. で、Alice がウサギの穴を落ちているときに、眠くなりながら “Do cats eat bats? Do cats eat bats?” とひとりごとをいっていると、ときどき間違えて “Do bats eat cats?” といってしまう場面がある。cats と bats が非常に似た発音なのでこのような間違いをしたわけ

だが、その日本語訳の「ネコ」と「コウモリ」はまるで発音が違う。しかし、ほとんどの翻訳はそのまま「ネコはコウモリを食べるかしら」を、ときどき「コウモリはネコを食べるかしら」と間違えたというように訳している。そんな間違いも起こす可能性はあるだろう。しかし、芹生訳と中山訳は「ネコはコウモリを食べるかしら」を「ネコをコウモリは食べるかしら」と間違えたという訳をしている。日本語の場合、たった一文字である助詞を間違えることは多いにありうるだろう。

Chapter II. The Pool of Tears の冒頭で Alice が “Curiouser and curiouser!” と叫ぶ。さっき縮んだ体が今度はどんどん伸びていったため、あまりに驚いて正しい言葉が使えなかったのである。この場合正しいのは *curiouser* ではなくて *more curious* である。このセリフの訳は翻訳者によって様々である。

田中訳 「まあ、へんてこれんな」

生野訳 「ますます変てこりんになってくわ！」

多田訳 「いよいよもって奇妙きてれつだわ！」

福島訳 「変てこりんなの、おかしいの！」

芹生訳 「てこへんだわ。ほんとにてこりんへん。」

石川訳 「いよいよもって奇妙てけれつかま不思議」

高杉訳 「だんだん、へんちきりんになっていくわ！」

中山訳 「きゃあ、とてっぴょうしもないよ！」

北村訳 「てこへん、へんてこ。」

立原訳 「いよいよ、へんちよこりんになってきたわ」

高橋訳 「ますます、妙だわ、ちきりんよ！」

楠 訳 「まあ、ふぎし！」

矢川訳 「へんてこんて、へんてこんてえ！」

生野訳、多田訳、福島訳は特に間違った言い方には訳していないようであるが、多田訳は注があって原文は文法無視の言い方をしていると説明してある。ところで原文の “Curiouser and curiouser!” であるが、これはこの著書で使われて以来有名になり、文法間違いであるにもかかわらず、成句として定着してしまった。当然ではあるが、日本では翻訳家たちが腕をふるうことのできるこの言葉が定着することはありえない。

翻訳比較(5) 言葉遊び

Chapter III. A Caucus-Race and a Long Tale に次のような場面がある。

“I had *not* !” cried the Mouse, angrily.

“A knot !” said Alice, …⁴⁾

not と knot という同音異義語の勘違いから、この後 Alice はネズミを怒らせることになってしまうのだが、この部分の訳はかなり翻訳家にとって難しいものであるらしく、うまく訳し得ていない翻訳もいくつかある。次の5つの翻訳はなんとか日本語で理解できるように訳してある。

田中訳 「へッ、あきれた！」—(中略)—「切れたのですって！」

生野訳 「何をけったいな！」—(中略)—「まあ何をけったの？」

芹生訳 「なにゆってんだ」—(中略)—「あら、結ってんでしたの」

立原訳 「言ってることが、てんでわからん」—(中略)—「あら、なにがからんだの？」

高橋訳 「きてないさ！」—(中略)—「きたないですって！」

Chapter IX. The Mock Turtle's Story に次のような場面がある。

“Ten hours the first day,” said the Mock Turtle: “nine the next, and so on” “What a curious plan !” exclaimed Alice.

“that's the reason they're called lessons,” the Gryphon remarked: “because they lessen from day to day.”⁵⁾

Mock Turtle が学校で受けた授業は、最初の日は 10 時間で翌日は 9 時間、というように毎日 1 時間づつ減っていった。というのも lesson は lessen と同じ発音であり、つまり授業 (lesson) は減っていく (lessen) ものだということなのである。この英語の仕組みを注をつけて説明しているのは、福島訳、高杉訳である。北村訳は「レッスン」というふりが

なをつけて訳している。この3つ以外の翻訳はそれぞれ工夫したものになっている。

田中訳

「一日一日少なくなっていくからね、だから少学校というんだよ。」

生野訳

「それがおさらいといわれる理由さ」—(中略)—「一日ごとにさらわれてへってくのさ」

多田訳

「それで日に何時間お稽古でしたの？」—(中略)—

「だからお軽古というのは」—(中略)—「一日一日軽くなるからな」

芹生訳

「だから勉強のことをけいこというんじゃないか」—(中略)—「授業時間がだんだんへっていくのと、だんだんふえていくのと、おまえさん、どっちがけっこうだね。」

石川訳

「毎日、勉強に時間を喰えば、だんだんへるの、あたり前だろ」

中山訳

「だから学校というんだよ。一日一日と、スクナクナル、つづめてスクール、すなわち学校さ」

立原訳

「だから時間割りなのさ。毎日少しずつ割引かれていくからな。」

高橋訳

「だからおさらいっていうのさ」—(中略)—「毎日さらうたびに減ってくからね」

楠訳

「へんな時間割りなこと。」アリスがいました。

「だから割引きっていうだろ。」—(中略)—「一日ごとに割引いていくのさ。」

矢川訳

「そりゃお勉強だもの、少しずつおまけしますってわけさ」

翻訳比較(6) 文の面白さ

原文においてテンポがよく面白味のある文章を、日本語でもそのように訳し得ているだろうか。Chapter VIII. The Queen's Croquet-Ground にこのような場面がある。何の理由もないのに Queen が 3 人の gardener の首をはねるように命じる。3 人の soldier がそれを実行しようとしたが、Alice が gardener たちをかくまってしまったために、見つけれないまま Queen の所へ戻ってしまう。そこで次の会話が行なわれる。

“Are their heads off?” shouted the Queen.

“Their heads are gone, if it please your Majesty!” the soldiers shouted in reply.

“That's right!” shouted the Queen⁶⁾.

soldier たちはうそを言ったわけではないのだが、Queen は勘違いしてくれたのである。これを訳し得ているのは 6 冊である。(高杉訳と高橋訳は注をつけて説明もしている。)

福島訳

「あの者どもの首をはねたか？」と、女王が叫びました。

「首はなくなってしまいました、陛下」と、兵士が、叫びかえました。

「よろしい！」と女王は叫びました。

高杉訳

「庭師たちの首ははねたか？」

と女王さまが大きな声をあげてききました。

「申し上げます。庭師たちの首はきえてなくなりました」

と、兵隊たちも大きな声で答えました。

「よろしい」と、女王さまはやはり大きな声でいいました。

北村訳

「首、はねたか？」女王がどなる。

「やつらの首、なくなりましたでございます、女王さま！」兵士は声をそろえて答える。

「よろし！」女王、またどなる。

芹生訳

「首は切ったか」と、女王が大声でいいました。

「おそれながら、首はなくなりましてござります」と、兵士たちも大声で答えました。

「ごくろう」と、女王が大声でいいました。

高橋訳

「あいつらの首ははねたか？」女王が大声でたずねました。

「首は失せましてございます。おそれながら、陛下」兵隊たちは大声で答えました。

「それでよし！」女王は叫びました。

楠訳

「首はちょんぎったか？」とクイーンがどなりました。

「おそれながら、やつらの首は消え失せましてございます。」と兵士たちも大声で答えました。

「よろしい！」とクイーンは大声でいいました。

立原訳は「おそれながら申しあげます、女王さま。あの者たちの首は、どこにもみつかりません。」と詳しく訳しすぎて原文の面白味がなくなってしまっている。生野訳の「おそれながら、あの者どもの首はございません、女王さま！」というのも、同じような傾向がある。田中訳、多田訳、石川訳、中山訳、矢川訳は soldier たちがはっきりとうそを言ったことになってしまっている。石川訳を例にあげておく。

石川訳

「あのものどもの首をはねたか」と女王は叫びました。

「恐れながら陛下、首ははねましてございます」と兵卒たちは大声で答えました。

注

- 1) Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* (Macmillan Publishers Ltd., 1986)p. 1
- 2) Ibid., p. 124 3) Ibid., p. 6 4) Ibid., p. 34 5) Ibid., p. 132 6) Ibid., p. 107

※この小論は、卒業論文の抜粋を一部書き直したものである。